

お念仏と共に ～ 如来に念じられて生きていこう ～

御影堂（奥） 阿弥陀堂（手前）を背景に記念撮影



御名みなに呼ばれ、御名を呼ぶ

家庭でも、お寺においてさえ「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」と念仏申す声を聞くことが難しくなりました。私自身も人前だと恥ずかしく、声に出しにくいです。

阿弥陀仏は、私達「苦悩の衆生」の救いのために南無阿弥陀仏という名を成就して、「南無阿弥陀仏と称よなえることによつて真実の自己に目覚め、仏の世界・浄土に帰つてきなさい！」と呼んで下さっています。だから私達が念仏申すということ、阿弥陀仏が私を呼ぶ声を聞くことになるのです。名は、呼ぶものであり、呼ばれるものです。そして名によって憶おもい起こし、なぜ名となつて呼び帰そうとされるのか、その心を尋たずねることが出来ます。「お母さん！」と子が親を呼ぶのは長い間、母親から念ぜられてきたからであり、「お母さん！」という呼び声となつて母親が現前しているのです。しかし自我の傲慢ごうまんな分別心では親子はバラバラです。それで阿弥陀仏は名となつて呼び続けて下さるのです。その名は実は私たち自身の名であり、阿弥陀仏に一心帰命いっしんきみまうする信心を我が名として与えようとされるのです。親鸞様はこの大悲心を生涯いただいてゆかれたのでした。

御み仏をよぶわがこえは御仏のわれをよびます御声みこえなりけり
御仏の御名をとなうるわが声はわが声ながらとうとかりけり

甲斐かい 和里子わりこ

親鸞聖人聖跡巡拝 真宗本廟奉仕研修

5月7日〜10日、19名で御本山参りをしてきました。

7日 7時59分、柳ヶ浦をソニックで出発。京都にお昼に到着後、六角堂へ。29歳の親鸞聖人が百日参籠された六角堂は聖徳太子創建の寺であり、華道「池坊」発祥の寺でもある。



続いて親鸞聖人が9歳から29歳まで修行された延暦寺へ。まず源信僧都が隠棲した「横川」の恵心堂へ。標高800mありのお山は牡丹桜が満開でした。



次に親鸞聖人が堂僧を勤めた「常行三昧堂」(不眠不休で90日間念仏を唱え続ける行をするお堂)のある「西塔」へ。



最後に延暦寺の中心「東塔」へ。その日は根本中堂の前にある延暦寺会館で宿泊。

日の出を拝み、聖人のご苦労を想いながらお朝事へ。途中で、寂かに咲く石楠花を見て一句、**聖人の歩みし道や石楠花**



8日 聖人生誕の地、日野の法界寺へ。幼き聖人はこの丈六の阿弥陀如来を拝まれたのである。



最後は聖人が得度した青蓮院。聖人は得度式は明日にといい、慈鎮和尚に、**明日ありと思うころのあだ桜 夜半に嵐の吹かぬものかは**と歌われたと言われています。



続いて、ふだんは入れない諸殿を拝観しました。



いよいよ、8日昼、改修を終え美しくなった同期会館に到着。はじめに御影堂、阿弥陀堂に参拝。引き

夕事勤行は、全国各地から集まった同朋と一緒に勤め。佐藤麗子さんが感話。夕食は大食堂で和気あいあい。夜、富山県の月光真先生のお話があり、午後8時半、長かった一日の行事が終了した。

9日 朝7時、両堂でのお朝事に続いて、帰敬式。上城佳代さんと渡辺敏晴さんが受式する。



朝食後の清掃奉仕は御影堂門の2階を担当。『大無量寿經』の会座を表す釈迦三尊にお参り。山門上から京都の景色を見ながら雑巾がけをする。

午後、蓮如上人御影道中にお許しをいただき特別参加。脚力に合わせて、山科別院から参加する者と、五条通りから参加する者と、本山で待機する者と一緒に別れる。各グループに教導先生と補導の先生が付き添って下さる。



今年の御影道中には、勝福寺から松本順さん(3年目)と牧本和孝さん(4年目)が参加。順さんは供奉人を勤め「蓮如上人さまのお通り」と声をかけて先導、4時過ぎ無事に本山に到着しました。



9日のお夕事は香田紀子さんが調声。夕食後は講義と座談に、感想文。



10日 午前中、最後の講義。昼食後、先生たちに見送られ本山を後に。京都駅でお買い物。午後2時半の「のぞみ」で帰途に。全員無事に全日程を終えることができました。

感想文

ご本山で書かれた感想文の一部をご紹介します。

日頃、勤行しながら雑念ばかりが頭をよぎって、こんなことでよいのかと悩んでいました。また、過去のことは戻らないと思いながら、愚かな煩惱ばかりの日々を過ごしておりましたが、少し心が軽くなりました。 **上城佳代**

よう来た、よう来た
ようやく行きづまったか？
それはよかつたな！
と、親鸞さまのお声を聞きました。このたびの御遠忌奉仕団に参加できましたこと、本当に嬉しく思います。

香田紀子
朝の晨朝参拝や夕事勤行などを経験でき、自分で出来ることから始めたいと思います。御影道中に参加し綱を引くことを体験でき、八日間に及ぶ御影道中がいかに苦難の連続だったか、想像できました。

小林 聖
以前、聞いた「親鸞聖人は

七五〇年も私たちを待っていて下さった。勿体ないことだ」という同行の言葉がよみがえってきました。御影道中に参加し、お輿を引くことができ、また、沿道のお店から出てきて合掌される尊いお姿に出会え、感動しました。 **佐藤麗子**

五年ぶりの東本願寺でしたが、素屋根も取り外され両堂の素晴らしさに見とれました。また御影堂の正式名称が「浄土真宗本願寺開山影堂」であり、阿弥陀堂が「本願寺無量寿仏宝殿」であることを初めて知りました。 **陶山光磨**

親鸞聖人の御旧跡を、「自分がその時代に生きていたら、どうだっただろう」と思いながら巡りました。御影道中は信心なくしては受け継がれるものではないですね。これからは皆さんの輪の中に入り聞法していきます。 **高橋直子**

前回の推進員研修では研修、研修で過ぎましたが、今回は本山の奥まで拝観でき、山門の清掃、御影道中の参加と、多くの行事に恵まれ大変良かったです。もっと親密な話ができると思うので、最後の夜はお酒を解禁して欲しい。 **中園尚武**

同朋会館の廊下に「私は正しい。争いの根はここにある」とあったが、「私は正しい」を疑うことなく生きています。お互いに「正しい」とらわれずに生きていけるようになれば、いいなあ。常に思い返し思い返し、少しずつ歩んでいこう。 **林 貴子**

四日市別院の中にいるような気がして、楽しく過ごすごとができます。 **外園エイ子**
御影道中は短い距離の参加でしたが、蓮如上人への熱い思いを共感できました。「なぜ、お念仏？」と問うことを忘れずに聞法していくことで、また人と出会うことで、お念仏に込められている願いをくみ取っていけるのではないかと思います。 **本多加代子**

遠い昔のことながら今日まで念仏が伝えられたことがすばらしく、私たちがそのことで生かされているんだなと思います。両堂参拝から諸殿拝観、清掃奉仕と日常経験できないことばかりで、有り難いことでした。 **松尾由美子**

蓮如上人御影道中に五条通りからお供させていただき、お輿の綱を引きながら「蓮如

上人さまのお通り」と思い切り声をあげさせて頂きましたこと、ありがたくありがたく感謝にたえません。 **向野順子**
今回の上山の日程は、勝福寺門徒の2名が御影道中に参加しているの、彼らをご本山でお迎えしようと思われました。御影道中の「御帰山式」で道中でのご苦労を感じ、涙が出ました。また、毛綱の実に感動を覚えました。

向野 茂
都会の真ん中にありながら、なんと静かな、きれいな空間かと、そこに身を置かせて頂ける喜びをかみしめています。朝、お仏飯をお供えする時、父母に話しかけるだけでしたが、「阿弥陀さまの御顔を見てお参りしていますか」と問いかけられたことを宿題にして帰ります。 **吉武康子**

今回の上山は50年ぶりです。悩みの少なかった若い頃から50年あまりたった今の自分を、阿弥陀さまや親鸞さまの御影の前で見させて頂きたくって来ました。それから、勝福寺の御遠忌までに恵信尼様のパッチワークを作りあげたく思っています。 **若林範子**

実際に参加して、供奉人の掛け声で坂道を駆け上ったり、沿道の人の合掌など素晴らしかった。「法名伝達式」での「三つの誓」のお話が印象に残った。教えを依りどころとした生き方ができなければ大いなる空過(むなしさ)だけの人生になる。なんとか乗り越えなければとがいている最中です。 **渡辺和義**

これまでの私は、遡って思うのは、親・祖父母ぐらいでしたが、今の自分があるのは、長い長い歴史といろんな方の関わりがあつて生かされていることを感じました。月光先生から「邪見憍慢悪衆生」のことを聞きし、恥ずかしくなると同時に、言い当てられたことで身体があつくなりました。 **渡辺末子**

今回の奉仕団に同行、聞法してさらに意を強くしました。これは私が三年前に作った辞世の詩です。
凡夫歲月故遲遲
煩惱興亡笑我痴
天命無情花自落
元知卽世任風吹
渡辺敏晴

ご門徒さんこんにちわ! 第十六回

今回は、中津市三保で家族ぐるみで果樹園を手広く経営している大久保清さん、春枝さんご夫婦をお訪ねしました。清さんは昭和22年生まれの72歳です。県の農業改良普及員の父親と、家で農業をしていた母親の間に四人兄弟の長男として生まれ、四日市の常徳で育ちました。

高校を卒業すると父親の影響もあつてか、就職せずにそのまま農業一筋の生活を選びました。理由を尋ねると「農業は自分のペースで仕事ができるし、誰に気兼ねをする必要もないので、精神的な余裕がある」と考えたそうです。当初は、稲と陸稲を作っていたそうですが、当時はミカン栽培が流行りで果樹園があちこちで造成されていきました。父親も果樹園経営に将来性を見いだし、父親が定年を迎えるのを機に土地を物色しているときに、今の地に9町8反という広い土地が見つかりました。清さんはちよつと広すぎるのと二の足を踏んだそうで

すが、父親の「一気にしなくても5年計画でやればいい」という言葉に励まされ、昭和48年に常徳から三保の地に両親と、結婚して子供が出来たばかりの清さん夫婦が一家揃って入植しました。入植したばかりの土地は一

農業一筋に歩む 大久保清春枝 (中津市三保)

までの収入源として5年間、父親のアドバイスでミカンの木と木の間にかボチャを植えて収入を得たそうです。その後も鶏の放し飼いや、ブドウの栽培、銀杏の栽培、ミカンだけに限らず、手広く経営を広げて行きました。清さん春枝さんご夫婦は、二男二女の四人の子供さんに恵まれ、今は一番下の息子さんと一緒に果樹栽培をしています。分担は、清さんが温州

面の雑木林、朝から一日中トラクターに乗る生活が二ヶ月間続きました。奥さんが当時の様子を思い出しながら「主人は長女を背中に背負ってトラクターに乗っていたの、イクメンの先駆けよ」と話してくれました。「イクメン」とは子育てに積極的に関わる男性を言いますが、清さんは時代の先駆者でもあつたようです。さて、徐々にミカン園として体裁が整いましたが、すぐに収入にはなりません。それ

くなると手伝いに一ヶ月、二ヶ月と長期にわたって帰ってきません。そして、お参りに来た住職さんや坊守さんとの会話を楽しみにしており、住職さんの話では、娘さんが父親をとても尊敬しており、家族の絆の強さを感じるそうです。奥さんの春枝さんは、宇佐市吉松の農家に六人兄弟の長女として生まれ、1歳年上の清さんと24歳で結婚され



背景に果樹園にかけた手塩

ました。その出合いを訪ねると行政主導の「農業後継者クラブ」で知り合ったそうです。清さんは、奥さんが「主人はとても働き者で人の三倍働いた」というぐらい、朝早くから夜は10時すぎまで働いたそうです。清さんの働き者という遺伝子はお母さん譲りのようです。ある時、病気で寝ていたお母さんは、果樹園が気になり寝間着のまま園内を

見廻り、それに気づいたお父さんが抱きかかえて布団に寝せつけた、というような働き者だったそうです。そしてお父さんも朝鮮で終戦を迎えた経験を持ち、少々のことでは決してへこたれない人だったそうです。そんな両親に育てられただけに、筋金入りの働き者なんですね。

清さんに農業の醍醐味を尋ねると「果樹園の仕事は草刈りをしたら一ヶ月間草刈り機を担いだまま、でも農業の良さは自分の一生を精神的に余裕を持って過ごすことが出来ること」だと力強く話されました。18歳の時の判断は間違いなかったようです。さて、清さんに趣味を尋ねると将棋と囲碁だそうです。でもそれ以上の楽しみは、お客さんから丹精込めて作った果物が「美味しかった」と言われることだと奥さんとにこやかに話してくれました。70歳を超えると以前のような頑張りがかきなくなつたそうですが、まだ当分は引退するつもりはないそうです。どうぞこれからも美味しい果物を作って消費者を喜ばして下さい。(文責 渡辺 重昭)

御遠忌委員会だより

響流山勝福寺の臨時総代会が4月16日に開催され、これまで御遠忌委員会で9回にわたって検討してきた「響流山勝福寺・宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌」の事業計画案等について審議した結果、全会一致で承認されました。
以下、その概要をご報告いたします。

事務局長 渡辺和義

第1号議案 事業計画

【御遠忌厳修趣旨】

社会が息苦しくなり、家庭崩壊のニュースが飛び込んでくる昨今です。その底には、仏さまに掌を合わすことを忘れた人間の驕りが隠れているのではないのでしょうか。

こうした時代だからこそ、門信徒一同、手を取り合って、親鸞聖人の御遠忌を勤めましょう。そして、ご先祖が大事に受け継いできたお念仏の心を、わが身の上に関き開いて参りましょう。

【御遠忌記念事業】

① 御遠忌テーマ

親鸞さまなぜ お念仏なの？

― 出会おう、語ろう、今こゝで―

【テーマ作品の募集】

随想、作文、絵、書、写真、短歌、俳句、川柳、詩、手芸、工芸、他

* 詳細については、別途チラシを作り配布する。

② お待ち受け聞法会・全20回

毎月第2土曜日に開催中

- ③ 真宗本廟奉仕研修と聖跡巡拝
5月7日～10日
- ④ 記念出版

『愚禿積親鸞―その生涯と教え 恵信尼公―その生涯とお便り』
(出版済)

『勝福寺史』 (仮称)

『御遠忌法話集』 (仮称)

『テーマ作品集』 (手作り予定)

⑤ 内陣莊厳御修復

(中尊) 上卓・輪灯・瓔珞・灯籠
(祖師前) 厨子・前卓・瓔珞・灯籠
(折障子)

【施工】 (株) はせがわ美術工芸

【御遠忌法要】

○ 恵信尼公七百五十回御遠忌法要

【日時】 11月23日(土)

【法要次第】

- 一、音楽法要
- 一、記念法話(渡辺愛子先生)
- 一、記念イベント(琵琶演奏)
- 一、御遠忌テーマ・パネルディスプレイ
- スカッシュオン

【お斎】 両日とも弁当(外注)

* 中園れいこ社中によるお抹茶の接待あり

○ 親鸞聖人七百五十回御遠忌法要

【日時】 11月24日(日)

【法要次第】

- 一、勤行(宇佐組法中)
* 雅楽つき
- 一、記念式典
- 一、記念イベント(寸劇?)
- 一、記念法話(孤野秀存先生)

講師「親鸞様 なぜ お念仏なの？」

* 11月はじめに「御遠忌法要実行委員会」を結成します。

第2号議案 予算案

【収入の部】 単位：千円

勝福寺一般会計より	2,	0	0	0
勝福寺永代経積立金より	3,	6	0	0
御遠忌御懇志	2,	0	0	0
お待ち受け聞法会・会費	3	5	0	0
『愚禿積親鸞』礼金	1	5	0	0
御仏前	1	0	0	0
合計	8,	2	0	0

【支出の部】

内陣莊厳修復費	3,	6	0	0
御遠忌法要	1,	0	7	5
お待ち受け聞法会	1,	0	0	0
印刷製本費、他	2,	5	2	5
合計	8,	2	0	0

【御遠忌御懇志について】

基本的には、御懇志の趣旨をよく理解していただき、あとは各自の自由に任せる。7月1日を目的に「御遠忌趣意書」及び「御懇志ご依頼文書」を配布し、7月末日までに総代会が集金する。

第3号議案 勝福寺組織見直し

【規則改正について】

「響流山勝福寺総代会規則」を改めて「響流山勝福寺運用規則」を作り、総代会だけでなく、教化事業全般を規則の中に位置づけていく。

【会計公開について】

これまで、総代会において、法要時の残余金を勝福寺一般会計へ繰り入れてきたが、今後は使途がより明確になるように、法要残余金を扱う会計を一般会計から独立させ、法要会計(仮称)とし、法要会計は教化事業に充てることとする。なお、法要会計は年度ごとに決算し、残余金は新たに作る「本堂営繕積立金」に繰り入れる。以上



勝福寺ホームページのQRコードです。スマホをかざすと、ホームページが開けます。

春の彼岸会

川村妙慶師の御法話を聞いての感想を、お二人の方に書いて頂きました。



縁は異なるもの味なもの

飯余 博美 (院内・宝蓮寺)

本願寺派の僧侶である私が、勝福寺様に足を運ぶようになったきっかけを改めて振り返っています。

お聴聞好き？の私は僧侶とはいえ、あちこちのお寺様に出掛けて行く訳にもいかず、お聴聞させて頂く機会は限られ、悶々としていた時期に、有難い「ご縁」が巡ってきたのです。それは勝福寺様の「ご門徒さんで、当時お母様が仏教婦人会長をされていた友人との出会いです。そこから、勝福寺様では日常的にご門徒さん

方のお勉強会や、お聴聞の場が度々用意されていることを知り驚き、垣根のない勝福寺様に、厚かましくお邪魔させていただくようになりました。

そうしているうちに、また嬉しいご縁が巡ってきたのです。川村妙慶さんとのご縁です。数年前から「妙慶さんの日替わり法話」のファンで、パソコンを開けば毎日必ず、お手紙のようなご法話が味わえ、私にとっては我が身も振り返ることの出来る、貴重な時間になっています。その妙慶さんなんと、勝福寺様に布教に來られるとの情報を、友人のお母さんから聞き、その後ご本人にお会い出来、ご法話をお聴聞する機会に恵まれました。益々ご縁の不思議と繋がっていく喜びを感じています。

初めてお会いした印象は、想像以上に親しみやすいお人柄で、気さくにお話ができて、沢山の方が悩みや不安を相談される理由が分かりました。日替わり法話では、

日々の身近な話題や相談事を仏様の教えに照らし、わかり易くも時に厳しさをもち、語りかけて下さいます。そして何よりも魅力的なのは、妙慶さんご自身も毎日生々しい？経験をされ、悩まれながら生きておられるのだと、伝わってくるころです。

日々、多くの方々を仏教を通して励まし、み教えを全国を駆け回ってお届けしている妙慶さんのお姿は、スーパードラマティックと呼ばれる尾畠さんと重なるのですが……私だけでしょうか？笑

とにかく、皆様も一度「妙慶さんの日替わり法話」を開いてみることをお勧めします。

法を中心にした生き方

若林 範子 (江須賀)

4月の7、8日、春の彼岸会のご講師として3度目の川村妙慶先生においで頂き、「自由に生き、自由に老いる」というテーマで御法話を頂きました。

今、百年寿命という時代、60代後半のかけこみ離婚がはやっています。この先、この人と過ごさなければと思うと、けりをつけたいと思つて自分を中心にしてかけこみ離婚に走るのでしょうか。しかし、お釈迦様は、中心は自分ではなく、「中心は法ですよ」と教えて下さいました。

映画の中のシーンや占い師さん、テレビ関係者の話などを通して、人間の問題をおもしろく、楽しく御法話下さり、自分を中心にしてきている事を考えさせられました。

先生は、早くにお父様を亡くされ、引きこもりになった兄さんにかわつてお寺の世話をするために、大谷専修学院で学ばれました。本当はアナウンサー志望だったので不満が多くあったのですが、仏法に出遇つてお念仏が深くなり、どうにもならない我身に出会わせて頂いたそうです。

お兄さんもその後、専修学院で学び、今は住職をしながら小説を書き、お寺を守っています。妙慶先生は京都のお寺へ嫁ぎ、法話活動をなさっています。同朋新聞に「ミカタがカワル」というコラムを毎月出され、悩みメールが一日百通も来るそうですが、それに一人一人答えられ、とても忙しい毎日を送っておられます。そんな中、勝福寺に來ると、御住職、坊守さん、ご門徒さんがふわーつとした雰囲気であげてくれ、すごく緊張がぬけるとおっしゃっていました。

編集後記

なごやかな二日間でした。また、御法話をお聞かせ頂きたいと思えます。

よく新聞などで「イクメン」という言葉を聞きます。今回、大久保さんご夫婦をお訪ねして、ご主人が「イクメンの先駆け」だったという話題になりました。背中に子供を背負つてのトラクターの運転、父親の心臓の鼓動が子供さんの記憶の中にずっと残っているのでしょうね。 渡辺 重昭